の大同二年（八〇七）で現在の本殿は延亨二年（一七四五）の建立である。室町時代末期から初められたといわれる流鏑馬（やぶさめ）は名高い行事で長い馬場はその盛況を物語っている。流鏑馬は鎌倉武士が好んで行ったもので馬場に立てられた的を馬に乗った武士が疾走しながら射るという武芸で、沢辺の山王様では、本郷、今泉大志戸、沢辺、小野、永井の六郷が順番に当番となり、流鏑馬祭典を施行した。しかし馬が殆んどなくなったのでこの行事も廃絶してしまったことは残念である。

……以下次号……

（土浦史研究家）

煮えくり返る思い

柳生四郎

その日に限って帰りが遅かった。

門をあけようとしたら鍵がかかっている。こんな時間に、何ごとかあったのか、不吉な感じが背筋を走った。と、何か紙きれがはさんであるのが目にとまった。ぬきとって急いで中に入って見ると、何としたことだ、手帳をはぎ取った紙片に、「伯母様はおけがのため広田外科へ入院されました。前田までお電話して下さい」と記してあった。どだっとぬかるみに尻もちをついたまま起き上れない、そんな気持ちだった。ようやく気を取りもどして連絡し、迎えの車で病院にかけつけた。遅いので表はしまっていて、暗い非常口から上るのであった。手さぐりで上る階段は、急で高くて、いくら上がっても上りきれないように感じた。一旦二階に上り、それからまた階段を下りて、一階の処理室というのへ通った。

そこに怪我人になった家内がいた。看護婦や親戚縁者の人達がベットを取り囲んで、いまや怪我人となった家内が横たわっていた。それでも家内は口をきいた。わりに落ちついて話をした。家内は生きていた、頭や神経には別条なかったと知って、ああよかったと大きくため息をついたとたんに、からだの力が一ぺんに抜けてしまったようにくたっとしてしまった。皆が帰ったあと、しーんとした病室で怪我人を見まもっているうち、沸々と怒りがこみ上げて来た。

きまりを守って正常に歩いていてさえこの通りなのだから、歩く人間はどうすればいいのか。腹が立って、腹が立って煮えくり返るようだ。ついに天下の道路は、人間の歩くためのものではなくなったのか。